

中学生の 音楽 2・3 上

指導者用デジタル教科書（教材） 音声テキスト

本資料は「指導者用デジタル教科書（教材）」に収録されている映像資料の音声をテキストにしたものです。本教材に関連した資料を作成される際の参考として、ご活用ください。なお、音声解説の無い映像資料は、一部割愛しております。

目次

P. 17 My Voice!	2
スムーズな息の流れに歌声をのせるには	2
P. 20 夏の思い出	2
江間章子	2
中田喜直	2
P. 23 My Voice!	3
<small>ひだくおん</small> 鼻濁音	3
P. 25 荒城の月	3
土井晩翠	3
滝 廉太郎	3
P. 40 フーガ ト短調	4
J. S. バッハ	4
パイプオルガンについて	4
P. 44, 47 交響曲第5番 ハ短調	5
ソナタ形式	5
L. v. ベートーヴェン	5
P. 48 オーケストラの主な楽器	6
フルート	6
オーボエ	6

クラリネット	6
ファゴット	6
ホルン	6
トランペット	6
トロンボーン	6
チューバ	6
ヴァイオリン	6
ヴィオラ	6
チェロ	6
コントラバス	6
ティンパニ	6
シンバル	6
P. 52, 54 「アイダ」から	7
アイダトランペット	7
G. ヴェルディ	7
P. 56 歌舞伎	8
歌舞伎で用いられる主な音楽	8
P. 60, 61 長唄「勧進帳」から	9
長歌「勧進帳」から（男声）	9
長歌「勧進帳」から（女声）	9
歌詞を音読しよう	9
姿勢	10
唄い尻	10
産み字	10
長唄について	10
P. 62 文楽（人形浄瑠璃）	11
太夫について	11
三味線について	11
P. 66 義太夫節「野崎村の段」から	12
義太夫節「野崎村の段」から	12
姿勢	12

P. 17 My Voice!

スムーズな息の流れに歌声をのせるには

おなかの辺りに息のもとを感じながら、息の流れが帯のように上のほうに伸びていくイメージで、声を出します。自分の思いを遠くに届けるような気持ちで、歌いましょう。

P. 20 夏の思い出

江間章子

江間章子は、1913年、新潟県高田市（現在の上越市）に生まれ、幼少期は、岩手県岩手郡平舘村（現在の八幡平市）で育ちました。作詞家として知られていますが、小説や童話、詩集、エッセイなどの作品も、多く出版しています。「夏の思い出」は、1947年、NHKから「夢と希望のある歌を」と依頼され、子どもの頃に岩手で見た、水芭蕉みずばしゅうの白い花と、終戦直前、尾瀬の入り口辺りで、水芭蕉を見たときの、感動の思い出を詩に表したものです。1947年に、中田喜直により曲がつけられ、NHK「ラジオ歌謡」で発表されました。「夏の思い出」、「花の街」は、どちらも終戦まもない頃につくられました。詩には夢や希望、平和への思いが込められています。

中田喜直

中田喜直は、1923年、東京府豊多摩郡渋谷町（現在の渋谷区）に生まれました。父は、「早春賦」の作曲者として知られる、中田章です。東京音楽学校のピアノ科を卒業後、歌曲の伴奏を務めるかたわら、作曲活動を本格的に開始しました。詩から触発されたイメージを音にする一方で、日本語が美しく聞こえる旋律の追及を自らの信念とし、晩年まで作曲活動を続けました。「夏の思い出」や「ちいさい秋みつけた」、「めだかの学校」など、今でも歌い継がれている作品を、数多く残しました。

P. 23 My Voice!

びだくおん 鼻濁音

この歌詞の中のガ行の音を、子音を鼻に響かせるようにして、発音しました。これを「鼻濁音」といいます。鼻濁音の使い方は、地域によって異なりますが、普通は言葉の途中にあるガ行の音や、助詞の「ガ」などを発音するときに用いられます。鼻濁音を使って歌うと、響きが柔らかくなって、言葉や歌詞が伝わりやすくなったり、音が下がりにくくなったりします。皆さんも上手に使って、歌ってみましょう。

P. 25 荒城の月

土井晩翠

土井晩翠は、1871年、宮城県仙台市せんだいに生まれました。本名は、土井林吉といます。「荒城の月」は、東京音楽学校から、唱歌集「中学唱歌」を編纂するにあたり、作詞を依頼されたものです。晩翠は、学生時代に訪れて印象を受けた、福島県会津若松あいづ つるがじょうの鶴ヶ城と、自分自身の故郷でもある、仙台の青葉城に思いを巡らせて、作詩したそうです。のちに、滝廉太郎の曲が採用され、1901年に発表されました。

滝 廉太郎

滝廉太郎は、1879年、東京府芝区南佐久間町（現在の港区西新橋）に生まれました。地方役人であった父の仕事のため、幼いときから神奈川県や富山県おおいだなどを移り住みました。15歳のときに、東京音楽学校に入学し、1898年に卒業後は、研究科に進みます。その後、ドイツへ留学しますが、2ヶ月足らずで肺結核にかかり、帰国後、23歳の若さで、この世を去りました。作品の多くは、研究科時代につくられ、「花」や「荒城の月」、「箱根八里」のほか、唱歌集『幼稚園唱歌』に掲載された、「はとぼっぼ」、「お正月」なども、この時期の作品です。

P. 40 フーガ ト短調

J. S. バッハ

ヨハン・ゼバスティアン・バッハは、1685年、ドイツの中央部にある、アイゼナハに生まれました。10歳までに両親を亡くしますが、兄のもとで音楽を学びました。バッハの家系は、7世代に渡って、数多くの音楽家を輩出した、音楽一族です。18歳頃から、宮廷楽団のヴァイオリン奏者となります。さらに、ドイツ各地の教会のオルガニストを務め、最後の赴任地となったライプツィヒでは、教会の合唱長の職に就きました。バッハは、演奏活動のかたわら、1000曲以上にものぼる作品を残しています。勉強熱心で、あらゆる音楽を吸収し、自分のものにしていった彼は、管弦楽曲や室内楽曲、オルガン曲、チェンバロ曲、宗教音楽など、幅広いジャンルに渡って作曲を行っており、それらは今でも広く親しまれています。

パイプオルガンについて

皆さんは、コンサートホールなどで、パイプオルガンの音を聞いたことがありますか。この楽器が、どのようにして音を出しているのか、簡単にご紹介します。パイプオルガンでは、鍵盤や足鍵盤を押すと、風を送る装置が働いて、風をパイプに送り込みます。瓶に息を吹き込むと鳴るように、空気が振動することで、音が出るのです。音の高さは、パイプの長さによって、また音色は、パイプの材質や構造によって決まります。たくさんの種類のパイプがあれば、それだけ音の高さや、音色の幅は、広がります。鍵盤の横には「ストップ」と呼ばれる装置があり、これで鳴らすパイプを選んで、音色を変化させることができます。トランペットの音色に変化させてみます。

リコーダーの音色に変化させてみます。

バッハのフーガ ト短調のような独奏曲の他、合唱など、他の人たちと演奏することも、多くあります。その場合、このようなモニターや鏡を見て、指揮者の合図を確認します。

P. 44, 47 交響曲第5番 八短調

ソナタ形式

「交響曲第5番 八短調」の第1楽章と第4楽章は、ソナタ形式によってつくられています。第1楽章を例に、ソナタ形式について学習しましょう。ソナタ形式は、通常「提示部」、「展開部」、「再現部」、「コーダ」の4つのまとまりで、組み立てられています。提示部では、互いに対照的な性格の第1主題と第2主題が現れます。

展開部では、提示部で示された主題などによって、曲がさまざまに展開されます。この曲では、動機の音型を繰り返し用いて、音楽を盛り上げています。

展開部の次は、提示部と同じような形で主題が再現される、再現部です。

最後は、コーダと呼ばれる部分で、曲や楽章の最後を締めくくります。

曲がどのように組み立てられているのか、今どの部分を聴いているのかが分かると、曲全体を通して、楽しむことができるようになりますよ。

L. v. ベートーヴェン

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンは、1770年、ドイツのボンに生まれました。幼い頃から、宮廷に仕える音楽家であった父から、音楽を学びました。1787年にウィーンへ行きますが、ほどなく母が重体になり、帰郷を余儀なくされます。その後、1792年に再びウィーンに出て、ハイドンのもとで作曲を学びました。その一方で、ピアニストとして活躍し始めていた彼は、しだいに人々を魅了し、音楽好きのウィーン貴族から、喝采を浴びるようになります。また、その頃から、作曲家としても高い評価を得るようになります。しかし、1798年頃から、耳に異常を感じ始め、遂には聴力をほとんど失ってしまいましたが、その後も作曲を続け、数多くの作品を通して、古典派の音楽の形式と内容を確立しました。

P. 48 オーケストラの主な楽器

フルート

これはフルートです。

オーボエ

これはオーボエです。

クラリネット

これはクラリネットです。

ファゴット

これはファゴットです。

ホルン

これはホルンです。

トランペット

これはトランペットです。

トロンボーン

これはトロンボーンです。

チューバ

これはチューバです。

ヴァイオリン

これはヴァイオリンです。

ヴィオラ

これはヴィオラです。

チェロ

これはチェロです。

コントラバス

これはコントラバスです。

ティンパニ

これはティンパニです。

シンバル

これはシンバルです。

P. 52, 54 「アイーダ」 から

アイーダトランペット

ヴェルディは、歌劇「アイーダ」の第2幕「凱旋の場」で、エジプト王朝時代に使われていたようなトランペットを用いるように、指定しました。この楽器が、初演当時に演奏された、いわゆるアイーダトランペットです。原始的な楽器の構造が、エジプト王朝時代をほうふつとさせます。それでは、近代になって改良されたアイーダトランペットで、演奏してみます。

G. ヴェルディ

ジュゼッペ・ヴェルディは、1813年、イタリア北部にある小さな村、レ・ロンコーレに生まれました。18歳のとき、ミラノ音楽院の入学試験を受けて不合格となったものの、勉強を続け、1839年には最初のオペラ「オベルト」を上演し、好評を得ます。その後も「ナブッコ」、「リゴレット」、「椿姫」などの名作を次々と世に送り、毎年のように新作オペラを発表する、人気作曲家となりました。「アイーダ」は、エジプトのカイロ歌劇場からの依頼で作曲され、1871年の12月24日に初演されました。

P. 56 歌舞伎

歌舞伎で用いられる主な音楽

歌舞伎で用いられる代表的な音楽には、18世紀初頭に、歌舞伎の音楽として生まれ、舞踊や芝居の音楽として発展した「長唄^{ながうた}」。17世紀末に大阪で生まれた、人形芝居の音楽として発展し、歌舞伎では竹本と呼ばれる「義太夫節^{ぎだゆうぶし}」。そして、舞踊の音楽として欠かすことのできない「常磐津節^{とこわづし}」、「清本節^{きよもとぶし}」があります。これらはいずれも、唄や語りによる音楽で、三味線を伴って演奏します。唄い手や語り手は、「見台^{けんたい}」と呼ばれる台に本を置いて、唄ったり語ったりします。長唄の唄い手は、足の部分が交差した、白木の見台を用います。これに対して、義太夫節の語り手は、両側に房の飾りがついた、黒塗りの重厚なイメージの見台を用います。そして、常磐津節の語り手は、多くの場合「蛸足^{たこあし}」と呼ばれる、曲線的な足の形をした朱塗りの見台を、清本節の語り手は、土台が箱型になったシンプルな黒塗りの見台を用います。次に、三味線に注目してみましよう。長唄で用いられる三味線は、「細棹^{ほそざお}」と呼ばれる、棹の細い三味線です。音色が鋭くて、歯切れがよいのが特徴です。一方、義太夫節では、細棹より棹が太くて胴が大きい、「太棹^{ふとざお}」と呼ばれる三味線が用いられます。低音の豊かな響きと余韻が特徴です。そして、常磐津節や清本節では、細棹と太棹の間ぐらいの棹の太さを持つ、「中棹^{ちゅうざお}」と呼ばれる三味線が用いられます。

P. 60, 61 長唄「勸進帳」から

長歌「勸進帳」から（男声）

- ① 主役が登場する場面なので、スケールの大きさを意識しながら、できれば一息で唄ってください。ここの「唄い尻」の唄い方にも、注意しましょう。
 - ② 「往くも」の「ゆ」、「別れて」の「わ」は、言葉がしっかりと伝わるように、意識して唄いましょう。
 - ③ 「逢坂の」で音が高くなりますが、力んで無理をしないように、声を自然に、楽に響かせるようにしましょう。
 - ④ 「山かくす」の「山」は、義経一行が超えてきた、逢坂山の事です。山を望むような気持ちで、（歌唱～♪）と唄いましょう。
-

長歌「勸進帳」から（女声）

- ① 主役が登場する場面なので、スケールの大きさを意識しながら、できれば一息で唄ってください。ここの「唄い尻」の唄い方にも、注意しましょう。
 - ② 「往くも」の「ゆ」、「別れて」の「わ」は、言葉がしっかりと伝わるように、意識して唄いましょう。
 - ③ （歌唱～♪）のように、低い音域で唄うときには、力まずに声を自然に響かせるようにしましょう。
 - ④ 「山かくす」の「山」は、義経一行が超えてきた、逢坂山の事です。山を望むような気持ちで、（歌唱～♪）と唄いましょう。
-

歌詞を音読しよう

長唄では、原則として日本語の発音や言葉のまとまりを大切に唄います。初めに、言葉のまとまりに気を付けて歌詞を音読してみますので、聞いてください。

次に、一つ一つの言葉をはっきりと発音することを意識して、少しゆっくりと音読してみます。

音読することで、日本語の発音について気付くことや、言葉のまとまりを感じ取ることができると思います。皆さんも唄う前に、ぜひ音読してみてください。お互いの音読を聞きあってみるのも、いいですね。

姿勢

まず背筋を伸ばして、正座をします。あまり胸を張りすぎず、肩に力が入らないようにしましょう。顎はやや引き気味に、上がらないようにしましょう。手は軽く指をそろえた感じで、太ももの真ん中辺りに、自然に置きます。椅子に座って唄う場合は、浅く腰を掛けて、姿勢を正します。

唄い尻

節のまとまりの終わりに用いられる唄い方のことを、「唄い尻」あるいは「節尻」といいます。

(歌唱～♪) というように、ぷつっと切らないで、(歌唱～♪) というように、習字の止めをイメージして、唄ってください。

産み字

音の高さを変化させながら、長く伸ばして唄う母音のことを、「産み字」といいます。この歌詞の中では、「着きにけり」の「り」の母音、「イ」が産み字にあたります。

長唄について

長唄の演奏は、唄を担当する「唄方」。三味線を担当する「三味線方」。「笛」、「小鼓」、「大鼓」といった、笛や打楽器で構成される「囃子方」で演奏されます。長唄では、ひな壇上段の中央に隣り合って座っている唄方と三味線方を、「立唄」、「立三味線」といいます。指揮者が存在しない長唄では、この二人の奏者が、互いの呼吸を合わせて、演奏を統率しています。また、長唄では「細棹」という種類の三味線が用いられます。長唄の三味線は、他ジャンルの三味線に比べて棹や糸が細く、胴に張られる皮も薄めで、ばちも小さいのが特徴です。音色は鋭くて歯切れがよく、唄や囃子とのリズムカルな合奏に、向いています。

P. 62 文楽（人形浄瑠璃）

太夫について

太夫は、老若男女あらゆる人物の喜怒哀楽や心理、情景を語り分けます。

太夫は、語る際に、下腹部に力を入れて発声ができるよう、次のような準備をします。まず、下腹には「腹帯」という長い木綿の帯をきつく巻きます。次に、砂や小豆の入った「オトシ」という細長い袋を、下腹のところに据えます。そして、「尻引き」という小さな台をお尻にあてて、両足のつま先を立てて座ります。このような座り方をすることによって、立っているのと同じような姿勢で、発声をすることができるのです。また太夫は、この「見台」に、「床本」という台本を置いて語ります。太夫にとって床本は最も大切なものなので、語り始めるときには、このように押し頂いてから、見台にのせて開きます。床本は印刷物ではなく、太夫が手書きしたものです。文章の右横に書かれた赤字を「朱」といい、語り方を示す記号などが、記されています。

三味線について

三味線は、太夫との呼吸や間を大切にしながら、太夫の語りをリードしたり、補ったりします。

義太夫節では、太夫の語りに負けないように、棹が太く胴が大きい「太棹」を用います。尼ヶ崎の段から、主人公の光秀が登場する場面を弾いてもらいます。音が低く、豊かな響きと余韻を特徴とする、義太夫三味線の音色を聴いてください。

P. 66 義太夫節「野崎村の段」から

義太夫節「野崎村の段」から

- ① この部分は、久作の台詞です。久作は、年老いたお百姓さんの男性ですので、その感じを出して語ります。また義太夫節では、登場人物が立っているときと座っているときとでは、語るトーンを少し変えます。
この場面では、久作は川の堤の上に立って、船の中のお染たちに向かって、呼びかけていますので、遠くの人に呼びかける気持ちで、少し高い声で語ります。
- ② 1 回目の「さらば」はお染の母、2 回目の「さらば」はお染の台詞です。母は母らしく、お染は若い娘らしく、表現します。
- ③ ここは情景を描写した「地の文」を、三味線に合わせて語ります。「遠ざかる」の部分は、遠い感じを出すように、（歌唱～♪）と語ります。

姿勢

私たち太夫が語るときには、腹式呼吸で発声をするために、このような座り方をします。本来は、このような姿勢で語りますが、皆さんは正座をしましょう。背筋を伸ばして座ります。胸を張りすぎずに、肩の力を抜き、手は軽く指をそろえて、太ももの中ほどに置きます。椅子に座る場合は、少し浅めに腰掛けて、姿勢を正しましょう。
